

[4/20]


(別紙様式第3号)

論 文 要 旨

論 文 題 目

A Study on Elderly Sexuality: Knowledge, Attitudes,
and Image of Care Staff in Nursing Homes

〔 高齢者のセクシュアリティに関する研究
—老人ホームのケアスタッフにおける知識・態度・イメージの検討— 〕

氏名 赤 嶺 依 子 

[はじめに] わが国が超高齢化社会へと進むなか、高齢者のQOL向上は重要課題である。本来、性（セクシュアリティ）は人間生涯の各時期において心身の健康と深く関わり、老後の生きがいやQOLと密接に関連する。しかし、高齢者のセクシュアリティをタブー視する風潮は存在し、医療や福祉施設の現場においても偏見は未だ払拭されているとは言えず欧米に比しわが国ではこの分野の研究が立ち遅れ科学的にまだ十分検討されていない。

本研究の目的は老人ホームのケアスタッフにおける高齢者のセクシュアリティに関する知識、態度、イメージについて明らかにし、その関連性を検討することである。本研究ではセクシュアリティを性機能や性反応という生物学的側面だけでなく、人間存在の生物学的、人間関係的、社会的ならびに文化的に関連する多次元で統合的な現象と捉えた。

[対象と方法] 調査は沖縄県内にある特別養護老人ホーム（5施設）のケアスタッフ

(看護師ならびに介護士) 204 名を対象に , 自記式アンケート・留め置き法にて行われた . 152 名から回答があり (回収率 : 74.5%) , 有効回答が得られた 126 名を分析対象とした . 質問内容は基本属性と状況因子 , 高齢者のセクシュアリティに関する知識と態度の日本語版評価尺度 (ASKAS-J) , およびイメージ評価の S D 法で構成されている . 分析方法は SPSS 統計パッケージを用い高齢者のセクシュアリティに関する知識 , 態度 , イメージの平均得点を算出し , 基本属性および状況因子 7 変数について有意差検定を行った . 次に 7 つの独立変数が知識 , 態度 , イメージに与える同時的影響をみるために重回帰分析を行った . さらに知識 , 態度 , イメージの関連はピアソンの積率相関係数で検討した .

〔結果と考察〕 高齢者のセクシュアリティに関する学習経験の有無は知識 , 態度 , イメージに大きく影響し , 学習経験がある者はない者に比べ高齢者のセクシュアリティに関する

る知識が有意に高く，しかも寛容な態度およびイメージを示した．また，高齢者のセクシュアリティに関する知識・態度・イメージの関連では，知識と態度 ($r=0.51$)，知識とイメージ ($r=0.48$)，態度とイメージ ($r=0.38$) でそれぞれ有意な正の相関が認められた．これらの結果は高齢者のセクシュアリティに関する知識の向上および，肯定的態度・イメージには教育が鍵となることを示唆している．しかしながら，高齢者のセクシュアリティに関する学習経験がある者は全体のわずか 31.7% で，そのほとんどが講演会あるいはマスメディア等を介しての学習であり，学校や施設で学んだ者は著しく少なかった．老年看護学の教育者は高齢者のセクシュアリティを，将来看護職に携わる看護学生に対しては基礎看護教育カリキュラムの中で，またケアスタッフに対しては施設内継続教育プログラムの中でしっかり位置づけながらその内容を充実させていくことが重要だと考える．

平成16年9月22日

論文審査結果の要旨

報告番号	*論文博第	号	氏名	赤嶺依子
論文審査委員		審査日	平成16年9月21日	
		主査教授	小川由英	印
		副査教授	竹藤毅	印
		副査教授	安仁屋洋子	印

(論文題目)

A Study on Elderly Sexuality: Knowledge, Attitudes, and Image of Care Staff in Nursing Homes

(論文審査結果の要旨)

上記論文に関して研究に至る背景と目的、研究内容、研究成果の意義と学術的水準について慎重に検討し、以下のような審査結果を得た。

1. 研究の背景と目的

わが国は超高齢化社会へと進み、高齢者のQOL向上は老年看護における重要課題である。本来、性(セクシュアリティ)は人間生涯の各時期において心身の健康と深く関わり、老後の生きがいやQOLと密接に関連する。しかし、医療や高齢者福祉施設の現場においても高齢者の性をタブー視する風潮があり、偏見は未だ払拭されておらず、その否定的観念は高齢者のケアの質に悪影響を及ぼす。欧米に比べ、わが国では、この分野の研究は立ち遅れ、科学的に十分に検討されていない。

本研究の目的は老人ホームのケアスタッフにおける高齢者の性に関する知識、態度、イメージについて明らかにし、その意義を検討した。

2. 研究内容

沖縄県内の特別養護老人ホーム5施設で勤務するケアスタッフ(看護師ならびに介護士)204名を対象に、自記式アンケートを留め置き法にて実施した。152名から回答があり(回収率:74.5%)、有効回答が得られた126名を分析対象とした。質問内容は基本属性と状況因子、高齢者の性に関する知識と態度の日本語版評価尺度(ASKAS-J)およびイメージを評価するためのSemantic Differential(SD)法で構成されている。ASKAS-Jの信頼性は高く、61項目(知識35項目、態度26項目)を点数化し評価するも

のである。SD法は心理学的意味をもつ態度測定に多く用いられる技法で、回答者はある概念（本研究では高齢者の性）について、二極評定尺度上で評価するものである。

高齢者の性に関する知識量、態度、イメージの平均得点を算出し、基本属性および状況因子の7変数（性、年齢、婚姻、職業、経験年数、高齢者との同居、高齢者の性に関する学習経験の有無）についてSPSS統計パッケージを用いて検定した。それらの独立変数が高齢者の性に関する知識、態度、イメージに与える影響を検討し、さらに、高齢者の性に関する知識量、積極的態度、肯定的イメージの相互関連についても解析した。

本研究で示された結果は以下のとおりである。

- 1) 高齢者の性に関する学習経験が有る者は無い者に比べ、それに関する知識量が有意に多く、それに対する積極的態度を示し、肯定的イメージをもっていた ($p < 0.01$)。
- 2) 性、年齢、婚姻などの変数を考慮した場合も、高齢者の性に関する学習経験が有る者は無い者に比べ、知識量が有意に多く、積極的態度を示し、肯定的イメージをもっていた ($p < 0.05$)。
- 3) 高齢者の性に関する知識量と積極的態度、知識量と肯定的イメージ、積極的態度と肯定的イメージの間にそれぞれ有意な関連性があった ($p < 0.01$)。
- 4) 高齢者の性に関する学習経験が有る者は全体の約30%で、看護あるいは介護養成校で学習した者は少なく、その殆どが講演会やマスメディア等を介しての知識取得であった。

3. 研究成果の意義と学術的水準

これまで、高齢者のQOL向上と関係の深い性に関する知識、態度、イメージについて科学的に分析した報告がなく、詳細な内容を知ることは不可能であった。そのような状況にあって、本研究で特別養護老人ホームのケアスタッフにおける高齢者の性に関する知識、態度、イメージについて明らかになり、高齢者の性に関する教育体系の不備と高齢者の性についての教育の重要性が示唆された。本研究は高齢者の性を客観的に評価する尺度（ASKAS-J）やイメージを評価するSD法を用いて分析を行った点で、研究の独創性があり、今後は対象を高齢者本人やその家族に広げ高齢者の性に関する知識、態度、イメージを検討しつつ理解を深めていく必要がある。老年看護教育に携わる者の責務として、看護教育カリキュラムや継続教育プログラムの中で高齢者の性に関する内容を充実させることは、高齢者のQOL向上の観点から重要な社会医学的意義を有し、その研究成果は高齢者のQOLに関する今後の研究に大きく寄与することが期待され、学術的に高水準にあるものと判断される。

以上により、本論文は学位授与に十分に値すると判断した。